

七月の第三月曜が「海の日」という国民の祝日に制定されたのは一九九五年であるが、趣旨は「海洋の恩恵に感謝し、海洋日本の繁栄を祈念すること」である。日本は国土面積が世界六一位の小国であるが、周囲の海域の生物や鉱物などの資源を調査、開発、保存する権利を保有する排他的経済水域（EEZ）の面積は国土面積の約一二倍で、世界六位である。

この六位が重要であるのは、日本より上位の国々はアメリカ、オーストラリア、インドネシア、ニュージーランド、カナダであるが、ニュージーランド以外は陸地面積でも大国であることである。前述のように陸地面積が六一位である日本が海洋大国である根拠は世界七位の一万四〇〇〇以上の島々が領土になっていることである。

とりわけ東京から一七〇〇キロ南方の日本最南端にある「沖の鳥島」は海面より約一メートル（満潮時には一〇センチ前後）高い二個の岩礁が突出しているだけであるが、日本の国土面積（三八万平方キロ）以上の四二万平方キロの排他的経済水域を確保しており、消滅しないよう周囲に防波施設を建造して保護している。

この工事には約二八五億円という巨額が投入されてきたが、荒波で二個の岩礁が崩壊して水没してしまえば、日本は広大な排他的経済水域を喪失することになるから投入金額に十分に見合う国益をもたらしている。この広大な海域は漁業に恩恵があるだけでなく、海底の資源の確保でも重要な意味がある。

一三世紀後半、モンゴル帝国に滞在したマルコポーロの記録『東方見聞録』には、沖合の小国ジパング（日本）に黄金でできた宮殿があると記載されている。これは岩手県平泉町にある中尊寺金色堂のことであるが、この東北地方にあった金鉱も佐渡にあった金鉱も枯渇し、現在では日本の金産出量は微々たるものになっている。

ところが深海の探査技術が発達し、そこには大量の希少金属（レアメタル）が存在することが判明した。希少金属は地上には少量しか存在しないが、産業にとっては重要な非鉄金属のことであり、それらは合金の素材として重要であるだけではなく、電子材料や磁性材料として先端産業に必須の資源である。

残念ながら日本の陸地にはほとんど存在せず、大半のレアメタルは中国、ロシア、アフリカ、南北アメリカなど少数の国々に五〇％から九〇％が偏在しており、日本の先端産業にとっての弱点であった。ところが最近のEEZ内の深海調査の結果、コバルトやニッケルなどレアメタルを大量に含有する団塊の存在が明瞭になった。

存在が判明しても、何千メートルの深海から採集することは容易ではなく、来年から採集技術の開発と実証実験が開始される。日本が近代工業の発展を目指して努力を開始した明治時代以来、必要な鉱物資源が国内に存在しないことが弱点になってきたが、レアメタルを資源とする先端産業では自国で資源が確保できることになる。

日本には前述のように一万四〇〇〇以上の島々が存在して世界七位であり、そのうち有人の離島は四二一である。九七％にもなる無人の島々は一部が観光に役立つ程度であったが、レアメタルが先端産業に必須の資源となる時代が到来し、一気に重要な国力の基盤に転換した。冒頭に紹介した「海の日」の意義を、この視点からも理解すべき時代である。